

テーマ別基礎ゼミ 神経科学グループ06

藤田 一寿

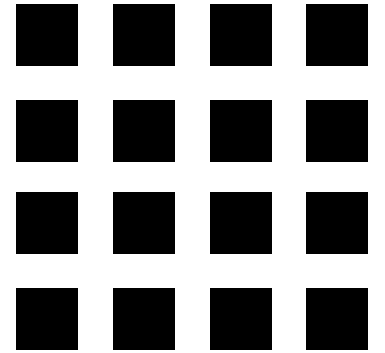
データのとり方

■ 悩んではいけない

- 錯視が見えたか見えないかを悩んで結論を出さない.
 - 錯視が見えるか見えないかの境界では、ある時見えるがあるとき見えないといった事が起きる.
 - 見える確率を知りたい.
- この数値なら見えるはずなど考えずに見える見えないを即決する.
- 錯視が見えるかどうかを他の人と相談しない.
 - 錯視が見える見えないは個人差がある.

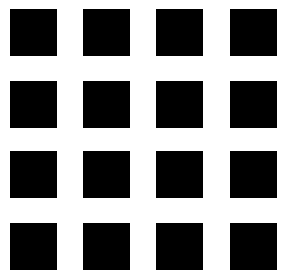
■ データをどう取るか

- 錯視画像のパラメタに対し，見えるを 1，見えないを 0 としてデータを取る。
 - ヘルマン格子の例
 - 格子の幅が5ピクセルのとき見えたなら 1，見えなかったら 0
- パラメタを様々に変えて見えるか見えないか記録する.
- 複数の人に対して実験をしデータを取る.
- 一人あたり何回かデータを取る.
- できればパラメタの値はランダムに且つ被験者には知らせない.



データの処理

- 各パラメタに対し，見える見えないの数値の総和割る試行回数を計算する．これが錯視の見える確率になる．



間隔	Aさん	Bさん	Cさん	見えた回数	試行回数	平均
2	1	1	1	3	3	1
4	1	1	1	3	3	1
6	0	1	1	2	3	0.66
8	0	1	0	1	3	0.33
10	0	0	0	0	3	0

格子の間隔と錯視が見えた確率の関係

